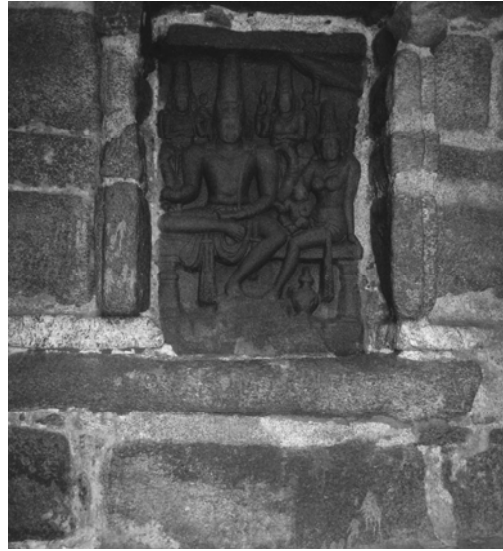


ソーマースカンダ像とラージャシンハ¹⁾

正信 公章

I

南インド、タミルナードゥ州マーマツラブラムにあるパツラヴァ王朝期の建造物群(1984年、世界文化遺産に指定)は、インド国内外から多くの人たちが訪れる観光名所であるが、そこで彼らがまちがいで目にするもののひとつが、海岸神殿東西のシヴァ祀堂それぞれの奥壁に祀られる、あいだに幼いスカンダをはさむかたちにその両親シヴァ、ウマーを配した、いわゆるソーマースカンダ(「ウマー、スカンダをともなう〔シヴァ〕」)形式の浮彫り石像である。この像は、海岸神殿の造営者であるパツラヴァ王ラージャシンハ(在位は8世紀初め)がつくらせたと考えられるもので、王は、王都カーンチーのラージャシンハ神祀はじめ領内各地のみずから造営したシヴァ祀堂もしくは神殿などに、おなじ形式の像を彫らせもしくは描かせて拝ませた。そのひとつである、マーマツラ



ソーマースカンダ
海岸神殿、西のシヴァ祀堂奥壁

ブラムの北北東5キロ弱(現サールヴァン・クッパム)に位置するアティラナチャンドラ神祀は、中央と左右あわせて三体のソーマースカンダが祀られる石窟祀堂であるが、外部の左右の壁に記された刻文には、祀堂造営の目的が以下のように述べられている。

atiraṇacaṇḍaḥ patir avanibhujām atiraṇacaṇḍeśvaram idam akarot /
iha giritanayāguhagaṇasahito niyatakṛtaratir bhavatu paśupatiḥ //A5

アティラナチャンドラ(「激戦に奮い立つ者」=ラージャシンハ)が諸侯の^{あるじ}主としてこのアティラナチャンドラ神祀をつくった、
ここで〔妻〕ギリタナヤー(ウマー)、〔息子〕グハ(スカンダ)、供まわりの衆とともに、パシュパティ(シヴァ)が一定のくつろぎの時をすごせるように〔と〕。

ここには同時に、祀られる対象がソーマースカンダであることがわざわざ説明されており、この王のかかわる他のソーマースカンダ祀堂もしくは神殿にそのような例はみられないことから、この神祀は、ラージャシンハがソーマースカンダ(現在のそれとは限らない)を祀らせた最初期の例ではないかと考えられる。この点については、①この石窟内に祀られる尊像すべてがソーマースカンダで占められるという特異な様相をとること、②この神祀の刻文には、他の例にない、アティヤンタカーマ(=ラージャシンハ)王自身の「即位の灌頂」(abhiṣeka)への言及(A2)があること、③同刻文でなされる神祀と霊峰カイラーサとの

類比(kailāsamandaranibham「カイラーサにもマンダラにも似た〔このシャンブ(=シヴァ)の館〕A3)は、この神祀が、カイラーサをものごとく讃えられるラージャスィンハ神祀(kailāsalīlām apaharati ... abhraṃliḥāgre「カイラーサの美をうばう・・・その先端が雲をなめる〔この館〕R11) 成立の時期に比して早い段階を示唆すること、④同刻文には、同王統治のおそい時期の刻文にあらわれる王名「ラージャスィンハ」がもちいられていないこと、⑤同刻文の成立は、同様に「ラージャスィンハ」の名がみえないガネーシャ・ラタ岩石祀堂刻文(またこれとほぼ全同のダルマラージャ・マンダパ石窟祀堂刻文)のそれに先行する(正信 2008、3 節)こと、がそれぞれ傍証になると考えられる。

ラージャスィンハがシヴァの尊像をつくらせた理由は、彼が熱心なシヴァ教徒を自任したことから明らかであるが、その際あえてソーマースカンダ=シヴァ像が選ばれたのはなぜか。それをうかがわせる同王帰属の刻文を以下にあげる。

teṣāṃ vaṃṣe prasūtād raṇarasikapuronmarddanād ugradaṇḍāt
subrahmaṇyaḥ kumāro guha iva paramād īśvarād āttajanmā /
śaktikṣuṇṇārivarggo viditabahunayaś śaivasiddhāntamārgge
śrīmān atyantakāma[h] kṣatasakalamalo dhūrddharaḥ pallavānām //R5

彼ら〔パッラヴァ王たち〕の家系に生まれた者、〔敵のチャールキヤ王〕ラナラスィカの城塞を打ち砕く者、恐ろしい王杖をふるう者、そのパラメーシュヴァラから、あたかもスブラフマニヤ=クマーラ=グハ(スカンダ)がパラメーシュヴァラ(=シヴァ)からそうしたかのごとく、生をうけたのが、その威力で敵の軍団を踏みつぶした者、多々方策を用いることで知られた者、シャイヴァスィッターンタの道にあつて〈よごれ〉をのこらず落とした者、パッラヴァ一門の長である、栄えあるアティヤンタカーマ。

samrājām aśvamedhāvabhṛthavirajasām bhūbhujām pallavānām asprṣṭāpallavānām
vimalatarabharadvājavamśodbhavānām /
ketor akṣīṇabāhudraviṇaḥṛtamahīcakravikhyātakīrtter yyo devād ekamallād guha
iva para[mād īśvarād āttajanmā] //P3

馬祀祭をしめくくる浄化沐浴儀礼をとおして身をきよめた帝王たちであり、すこしの危難にも見舞われる/パッラヴァ一門にあらざる者たちに触れることのなかったパッラヴァ王たち、何にもまさって純血の、バラドヴァージャの家系の出である者たちの

旗頭であつて、欠けることなき腕力と財力でかちとった大地一円にその名声が知れわたったエーカマツラ(「ただひとりの闘士」=パラメーシュヴァラ)陛下から、あたかもグハがパラメーシュヴァラ(=シヴァ)からそうしたかのごとく、生をうけた者、

ここでは、ラージャスィンハの父である先王パラメーシュヴァラすなわちパラメーシュヴァラヴァルンマン1世が同じ名のシヴァ神に、ラージャスィンハがその息子スカンダに

それぞれなぞらえられており²⁾、両刻文ともに、ソーマースカンダを祀るそれぞれの祀堂もしくは神殿外側の基部のまわりに帯状に配置されていることから、ラージャスィンハが、シヴァの勇猛を受け継ぐ軍神スカンダにみずからをなぞらえることで、自身が、シヴァを尊崇した先王（正信 2014、Ⅱ）の政教両面にわたる正当な継承者であることをひろく世に示すことを意図したことが了解される。³⁾

初期のソーマースカンダ像については、ウマーの顔の向きなど類型のちがいに注意してその成立時期をラージャスィンハ以前と想定し、ラージャスィンハの時代に制作されたものと区別する見方がある(Ghose 1996, pp. 12-13, Lockwood et al 2001, chap. 2)が、必ずしも類型のちがいを異なる王の時代にそれぞれ対応させる必要はなく、また、論者たちにラージャスィンハ以前のソーマースカンダ像があるもしくはあったと想定されるダルマラージャ・ラタ岩石祀堂、ラーマーヌジャ・マンダパ石窟祀堂、もしくはオルカル・マンダパ石窟祀堂のうち、前2者の祀堂はともに、ラージャスィンハ帰属と考えられる刻文を有しており（それぞれ正信 2009、2010 Ⅲ）、最後の祀堂については、近接する祀堂（ヴェーダギリースヴァラル山上神殿、後出「ティルッカリユグンドラムの祀堂」参照）にラージャスィンハの時代に制作されたと考えられるソーマースカンダ像がみられる(Longhurst 1924, p. 21 参照)ことから、先の見方には検討の余地があるようにおもえる。

Ⅱ

パッラヴァ王ラージャスィンハによって創始されたと考えられるソーマースカンダ像は、その後どのようなかたちで展開したのだろうか。マレーシアのペナン・ヒルにあるムルガン神殿、正式名称シュリー・アルロリ・ティルムルガン・アーラヤム（「幸ある、恵みの光、栄えあるムルガンの聖所」）が、神殿の修築を記念して刊行した冊子の中に、「ソーマースカンドル」（ソーマースカンダ）と題する、タミル語で書かれた小論⁴⁾が掲載されている。ムルガンは本来タミル人の信仰する民族神であるが、北方起源のスカンダと習合したことから、このようなテーマが扱われているのである。この小論では、この種の冊子によくみられるように著者の名前は記されず、またほかからそのまま転載されたものである可能性もあるが、そこには、像容の哲学的解釈、過去のさまざまな像容解釈、ラージャスィンハ統治期の造像例、工芸教本による造像規範、像を拝むことの効用など多方面にわたって、ソーマースカンダにかかわることがらが、古代、中世から近代にいたる先達ののこしたタミル章句を随所にはさみつつ論じられている。

以下には、ラージャスィンハの及ぼした当代もしくは後代への影響をさぐるという観点からこの小論を全文訳出・提示し、訳文末に小論に言及のあるソーマースカンダ尊像の所在地を示す図を作成、付置しておきたい。訳文では訳者による最小限の補足、説明（出典明示、ときに字句の訂正を含む）をそれぞれ〔 〕、（ ）で示し、原著者による説明を（（ ））で区別する。

ソーマースカンドル

香油で髪を整える神妃と、我らの主自身との
あいだに、子どもであるクマラヴェール（カンダン、スカンダ）がいるありようは、
大地をおおう夜と昼のあいだに、
夕どきというひとつに結ぶものをやむことなく配する自然のありようとおなじである
5)。

カンダ・プラーナム(1. 1040)

シヴァン(シヴァ)の聖所に、5体お立ちくださる尊像はなくてはならないもの。カネーサル、ムルガン、ソーマースカンドル、アンビガイ（母神ウマイ）、サンデーサルというのがそれ。これらのなかで、哲学的な重要性にとむ特徴をもった形がソーマースカンドルである。サハ（＝サ「と一緒に」）、ウマー（連声規則によりサ+ウマー>ソーマー）、スカンダル（スカンダ+）といった北の言葉（サンスクリット）に由来する〔この〕語には、<ウマイ（ウマー）と一緒に、またカンダン（スカンダ）と一緒に示現する者>という意味がある。すなわち、大神シヴァンが神妃ともカンダンとも一緒に姿をお見せくださる、恵みの像容。神を、家庭をいとむ者として、またいとしい夫として、また愛情いっぱいの父親として、息子と一緒に見せるこの形は、楽しんで幸せな気持ちになるために必要な優美さととむ、恵みの尊像である。

サッチダーナンドム（サチュ（サットゥ）+チト（チットゥ）+アーナンドム）が、ソーマースカンドル形象の本質である。

サットゥ	チットゥ	アーナンドム
真	知	喜
シヴァン	ウマイ	スカンダン（カンダン、スカンダ）
稀有	純	美

サットゥであるシヴァン神格とチットゥである母とのあいだに生まれたアーナンドムという形のカンダンと一緒に示現するかたちになったソーマースカンドルは、主宰神格の様態であらわれた者である。これこそが、シヴァンの聖所を支配する主たる形象である。この形の含意するものは多くある。「稀有のなかにある純な美にこそ讃えあれ」（4. 126）とっているティルヴァーサガム（9世紀後半成立、マーニッカヴァーサガル作）の行間に隠された意味は、この形にほかならないと賢者たちはいう。真も、知である善もあわさったら得られるのが喜ということを、この像容は例証している。この形象において、大神シヴァンも超越したありようを、女神も和合したありようを、カンダンも心を奪ってしまうありようを見せている。夫、妻、子供という家庭の3つの価値それ自体を完全なものにするのがこの形という者たちもいる。子供を両親のあいだにおいて祝う、お祭り騒ぎの形はこれ。

いずれのシヴァンの聖所においても、ソーマースカンドルには特別の場所が与えられているけれども、ティルヴァールール（タミルナードゥ州ティルヴァールール県）は、この大神にふさわしい特別の聖地である。カマライッティヤーゲーサル（シヴァンの一様相）、アーリッテール（「円盤形の山車」の意）、ヴィッタガル（シヴァンの一様相）といったいずれもこの聖地でこれらは讃えられている。ティルヴァールール・ナンマニマーライを歌って

くださったクマラグルバラ・スヴァーミガル（17世紀）は、カマライッティヤーゲーサルであるソーマースカンダルに対するある新しい説明を驚くべき仕方を与えている。我々のパーラダム国（インド）にあるカンガイ、ヤムナイ、サラスヴァディという3つの聖なる大河ともどもの合流点である、三つ揃いになったティリヴェーニ・サンガマム（「三つ編みの合流点」の意）というピライヤーガイで沐浴することは、大変な聖なる行為となるではないか！ ティルヴァールールにあって、踊る美神であるソーマースカンダルをみるとき、クマラグルバラル（クマラグルバラ・スヴァーミガル）にはティリヴェーニ・サンガマムのことが思い起こされてくる。大神シヴァンも白い灰を身にとって塗りつけていることで白い色のカンガイのごとくに、神妃ウマーも自身の濃青色のゆえにヤムナイのごとくに、赤に染まった色のカンダンもサラスヴァディのごとくに姿をお見せくださっている。この恵みのサンガマムの着想は、類まれなる詩となって花開いている ——

その体の白い灰によって、恩恵によって、アールール（ティルヴァールール）の主（シヴァン）は、
清らかな姿の聖河カンガイにほかならない。美しい姿の
女性（ウマイ）がヤムナイ。あのヴァーニ（サラスヴァディ）河もクマラン（カンダン）
にほかならない。我々は〔三神にひたって〕沐浴しよう、ひとりになって。
ティルヴァールール・ナーンマニマーライ（38）

もう一つの歌でも、ソーマースカンダル形象の特質をととも美しくクマラグルバラルは語っている。

強さと豊かさを完備した名高いカマレーサル（カマライッティヤーゲーサル）の
尊像、その左側に
位置する、緑の髪房のウマイヤール（ウマイ）の尊像、
両神にとって不死の霊薬である、
鉄の鋭い槍もつおさな子（カンダン）の尊像は、
類まれなる像である。美質を三つそなえた
よき像となるまさにそのことで、これら〔三神〕は全世界の
第一原因たる者となって教示しているのだ。（同 32）

ソーマースカンダル形象を想うとき、カーンジブラム（同カーンジブラム県）が我々に思い起こされてくる。カーンジ（カーンジブラム、カーンチー）のイエーガンバレーサル（シヴァンの一様相）祀堂も、クマラ・コーッタム（「クマラン（カンダン）の聖所」の意、その南南東 600m）も、カーマーッチヤンマン（ウマイの一様相）祀堂（さらにその東南 200 m）も建っているその〔位置関係の〕ありようは、〔カンダンをあいだにはさむ〕ソーマースカンダルそのままの形を示している。カンダ・プラーナムの著者カッチヤッパル（1400年頃あるいは17世紀に下るか）は、この様を驚異的な類比のかたちで示しており、昼と夜の間の夕どきのありようをこれは示しているといっている（冒頭詩節参照）。パーンバン・スヴァーミガル（1848/53-1929）がソーマースカンダルの本質を美的に示すある歌は次のとおり。

価値あるサットゥが、たえることなく
 もちきたる、〔その〕美しさにふれて光りかがやく、
 恵み豊かなチットゥ。〔その両者とあわせて、〕満足をもたらす
 大変な喜びというインバム（アーナンダム）も
 一緒になったことば（サッチダーナンダム）にあつて、前に
 あるのがシヴァンという〔究極の〕目的、中間にあたるのが
 尊いお姿のサッティ（ウマイ）、めでたき終わりに
 あられるのがスピラマニヤム（カンダン）にほかならない。
 （タハララヤ・ラハシヤム 2.1）

ソーマースカンドルの形は、タミリヤガム（タミル語圏の内）にこそふさわしい。偉大な
 大ヨーガ行者である大神シヴァンを偉大な大享受者として示すこの像容についてアイング
 ルヌール（4世紀頃成立、以下の詩節はペーヤナール作）が語っているのをみなさい——
 仔をあいだにはさむ雌〔雄〕のシカみたいに、
 男の子が真ん中になるようにして、
 あの人たち〔夫婦〕が憎みあうことなく横になっているの⁶⁾は、確かにとても素敵なこ
 と、
 群青色の〔海〕が大地を囲んだ
 この世界でも、天上でも、〔探し〕わめいたってなかなかお目にかかれないよ。 401

シヴァン教のティルムライの、とりわけテーヴァーラム中ティルヴァーサガムの数々の
 歌のなかにソーマースカンドル形象にかかわる言及は何もない。そうではあつても、ティル
 ニャーナサンバンダル（7世紀）の、テーヴァーラム中、ティルッカーラーイル（同ティル
 ヴァールール県）へのパディガム（「十讃歌」）に

母である者よ、父にもふさわしき数々のありように
 なった者よ、⁷⁾よき信愛の徒の近くにいる者よ、
 遠くにいる者〔/赤やかな者（シヴァン）〕よ （テーヴァーラム 2.15.4）

とある部分は、この形象を想い起こさせるものと解釈することができる。

パッラヴァル（パッラヴァ）の時代以降、ソーマースカンドルの形は高い評価を得た。ナ
 ラシンマヴァルマン（ナラスィンハヴァルンマン）2世（イラーサシンマン（ラージャスィ
 ンハ）〔在位〕680-700）時代の石窟祀堂でも、石造りの神殿でも、奥壁の浮彫りとしてソ
 マースカンドルの尊像が形にされた。マーマツラブラム（同カーンジブラム県）、イラーマ
 ヌサ・マンダバム（ラーマーヌジャ・マンダパ石窟祀堂）の内室の奥壁にも、タルマラーサ・
 ラダム（ダルマラージャ・ラタ岩石祀堂）の第3層にある内室にも、マーマツラブラムに隣
 接したサールヴァン・クッパム（同カーンジブラム県）、アディラナサ⁸⁾ンダ・パッラヴァ・
 ギルハム（アティラナチャンダ・パッラヴァ〔エーシュヴァラ〕・グリハ）石窟祀堂（アティ
 ラナチャンダ神祀）奥壁にもある浮彫りが、このことを確証している。カーンジのカイラー

サナーダル祀堂（カイラーサナータ神殿すなわちラージャシンハ神祀）、マーマツラブラムの海岸祀堂（海岸神殿）、パナマライ（同ヴィリュップラム県）のタラブリーサル祀堂（ターラギリースヴァラル神殿の誤りか）、これらの場所にも、全く同じこの方式によるソーマースカンドルの浮彫りがある。サールヴァン・クッパム、パナマライの彫像には、ソーマースカンドルとともにマラローン（ブラフマー）もマール（ヴィシュヌ）も、これをとりまくように示現している。ティルックハックンドラム（ティルックカリユグンドラム（同カーンジブラム県）の誤りか）、ティルマライッカドゥ（同ナーガッパッティナム県）、ティルップッリルックヴェールール（同ナーガッパッティナム県）、ティルップランバヤム（同タンジヤール県）の祀堂にも、内室奥壁にソーマースカンドルの尊像がある。ティルッパインニーリ（同ティルッチラーッパッリ県）の石窟祀堂で、大神シヴァンの右側（左側でなく）にアンビガイがすわった形でソーマースカンドル像がみられるのは、ほかにはない特徴的なことである。この像のアンビガイの足もとに、ある像がみられる。これをヤマン（閻魔）といって、この祀堂はヤマン祀堂と呼ばれている。けれどもこの像はムヤラガン（鬼の一種）というのが適切である。イラーサシンマン時代ののちはソーマースカンドルの形が内室の奥壁に形づくられることはないと考えることができる。

ソーマースカンドルの形について、工芸の教本をすこし調べることにしよう。シルバラッティナム（サンスクリット原題はシルパラトナ、16世紀後半成立、シュリークマーラ作）という教本に、この形象は〔大神・神妃・子の〕3つの形で説明されている(2.22.1-16)。大神シヴァンがすわった像容では、左足を折り曲げておいて右足を踏み下げるかたち⁹⁾にして〔このかたは〕示現している。トラの皮も絹の衣も身につけたこのかたは4本の手をもつかた。右手2本にもパラス（斧）もアバヤム（施無畏）印も、左手2本にもシカもヴァラダム（与願）印もしくはシンハガラナム（正しくはシンハガルナム「ライオンの耳」）印もかたちをなしている。このかたは、右の耳にマガラム（海獣の一種）の耳飾りもしくはライオンの耳飾り、左の耳にも葉形の耳飾りをつけている。もしくは両耳ともに円形の耳飾りをつけている。ジャダー（巻き上げ髪）型の冠も、へびの腕輪も、ピルパラム（インドボダイジュ）の装飾も身に装っている。大神シヴァンの左側に、神妃がすわっている。その左足は踏み下げるかたちに、右足を折り曲げてすわっている。その両手とも、右手もハスの花をもち、左手はシンハガラナム印のかたちをとるか、坐具においた状態にたもっている。〔神妃は〕カラダム（円錐上の入れもの）型の冠をつけている。大神シヴァンとウマイとのあいだに、カンダンは小さい子のありようである。彼はウマイのひざにすわっているか、踊りを踊っている最中であつてもよい。カラダム型の冠、マガラムの耳飾り、サンナヴィーラム（勝利の花づな）といったものを彼はつけている。彼の両手のうち右手はハスの花をおいてしかるべきである。もしくは両手ともにハスの花があつてしかるべきである。

神妃〔が〕その右手に青ハスの花をもち、また左手はヴァラダム印のかたちをとつていても、それはよくあることだ。アンビガイは、緑色の女性となって、赤のサーリーの衣服を身につけて示現する。

カンダンが踊りを踊る像容である場合、彼の左手は果実をもち、また右手はスーシ（示唆）印のかたちをとつてい。いくつかの形では、左手は垂れるにまかせた状態にできている。

ソーマースカンドルの形の両側にナーナムガン（ブラフマー）もティルマール（ヴィシュヌ）もそれぞれの神妃とともにいることが必要であるとカーラナーガマム（サンスクリット

原題はカーラナーガマ、成立年代未詳) はいっている(1. 11. 251cd-252ab)。

クダンダイ(同タンジャーヴール県)近く、ナーッチヤール祀堂に隣接したイラーマナデー
イーッチャラムのソーマースカンドルの形をとったアンビガイの手には、シヴァンの牡ウ
シがみられる。

およそこの世界にあって、とても大きなソーマースカンドルの形は、シュリーランガー
(スリランカ)のティルッケーデーッチャラム(北部州マンナール県)にある。

シヴァンの聖地のいくつかでは、シヴァン神、アンビガイ、ムルガン(カンダン)とい
った者たちの聖所は、[前二者のそれがムルガンのそれをあいだにはさむ]ソーマースカ
ンドルの形に建っている。ティルッカルガーヴール(タンジャイ(タンジャーヴール)県)、
ティルッカッリル(センガルパットゥ県(タミルナードゥ州現ティルヴァール県))の
それを指摘することができる。

においでるコンドライ(ナンバンサイカチ)をつける大神と、「においでる花の髪房、垣
根のツタ[の実]のごとく赤い唇の優美な女性ウマイヤール(ウマイ)」(テーヴァーラム
3. 100. 2a、この詩句はティルニャーナサンバダラ作)とのあいだに、「邪神の頭目を倒し
た、光る刃の長槍」(ティルムルガートルッパダイ 46、ナッキーラル(7-8世紀頃)作)
の使い手、ニワトリを旗印とする[カンダン]も示現する像容を、シルットンダ・ナーヤ
ナールにのみ神が恵んだことをペリヤ・プラーナム(12世紀成立、セーッキリヤール作)は
示す。

赤やかな体に黒い髪、立派な上着をまとった¹⁰⁾パイラヴァン(シヴァンの一様相)
は、我々が
生きてゆくための食事もとらずに、いったいどこに姿を消したのかと、[彼が]探して
気も狂わんばかりに外へ出てくると、消えたはずのそのかたが、その[妻である]、山
がもうけた¹¹⁾
娘(ウマイ)もサラヴァナム池の息子(カンダン)もともなって、みずから近づいてく
る。

(ペリヤ・プラーナム所収)シルットンダ・プラーナム 84

ソーマースカンドルの形を拝む者は、家庭でよき人たちとともにつつがない暮らしをう
んと味わって喜ぶとカンダ・プラーナムは語る。

古くからある世界が称讃するソーマースカンドルそのかたに奉仕する者は、
よき子どもにしても、子孫の継承にしても、喜ばしきものをめでたく手に入れる。・・・
(出典未詳)

ティルツェンドゥール(同トウットウツクディ県、正しくはティルッパラングンドラ
ム(同マドゥライ県))へのティルッパガリユ(「栄えある讃歌」)の中で、アルナー(正し
くはアルナ)ギリナーダ・スヴァーミガル(14-15世紀)がいうように、

シカと斧もつ手がかがやく主、ウマイ[それぞれの]二つの眼をともに

楽しませてそのひざの上で育つ若い者（カンダン）よ。

（ティルップガリュ 28）

と我々もうたいあげて喜びを得よう。



「ソーマスカンダル」に言及のあるソーマスカンダ尊像所在地

尊像を祀る聖所にラージャシンハ帰属刻文をともなう所在地を◎で区別する

注

1) 本稿で使用するサンスクリット刻文テキストとその略号は以下のとおりである。略号につづく数字はテキスト該当箇所の識別番号を示す。

ラージャスィンハ帰属

アティヤンタカーマ刻文群(ラージャスィンハ帰属とすることについては、正信 2009 参照)

アティラナチャンダ石窟祀堂刻文 : A *Epigraphia Indica*(EI) 10, no. 23-24
(E. Hultzsch ed.), plate, nos. 25-26 (E. Hultzsch ed.)

ラージャスィンハ神祀刻文 : R *South Indian Inscriptions* 1, no. 24 (E. Hultzsch ed.)

パナマライ祀堂刻文 : P *EI* 19, no. 18 (V. Rangacharya ed.), B
cf. G. Jouveau-Dubreuil, *Pallava Antiquities*, London 1916 (New Delhi 1994), Plate I

- 2) この点については、すでに Ghose (1996) が指摘している (p. 21, note 38)。
- 3) これとあわせて、像に父への追慕の念が反映されているとみる解釈については、正信 2014、結び参照。
- 4) “Cōmāskantar” (anonymous), in *Sri Aruloli Thirumurugan Temple, Penang Hill, Mahā Kumpāpiṣēkam 22-5-2002*, Penang 2002.
- 5) *Project Madurai Etext (PME)*, no. 241 を参照し、āratokkum を ārokum に訂正。
- 6) *PME*, no. 28 を参照し、kiṭaikka を kiṭakkai でよむ。
- 7) *Digital Tēvāram* 該当箇所を参照し、āya をよみのぞく。
- 8) vicai を raṇaca に訂正。
- 9) 初期の造像例では、一般に左右逆のかたちをとられる (冒頭写真参照)。
- 10) *PME*, no. 227 該当箇所また kañcukattiṅ (31) を参照し、kañcukantu を kañcukattu に訂正。
- 11) *PME* を参照し、yanta を payanta に訂正。

参照文献

A. H. Longhurst, *Pallava Architecture*, Part 1, Simla 1924.

R. Ghose, *The Tyāgarāja cult in Tamilnāḍu: a study in conflict and accommodation*, Delhi 1996.

M. Lockwood et al, *Pallava art*, Madras 2001.

正信公章「アティラナチャンダ石窟祀堂刻文とガネーシャ・ラタ岩石祀堂刻文」『アジア学科年報』2 (2008)、pp. 11-21

正信公章「ダルマラージャ・ラタ岩石祀堂刻文について」『アジア学科年報』3 (2009)、pp. 1-8

正信公章「カリヤルシンガルについて」『アジア観光学年報』11 (2010)、pp. 67-74

正信公章「アイヤディガルについて」『アジア観光学年報』15 (2014)、pp. 49-60

<http://www.projectmadurai.org> (Project Madurai)

http://www.ifpindia.org/digitaldb/site/digital_tevaram/U_TEV/HOME.HTM (Digital Tēvāram)

なお、本文中に使用した写真は、2008年3月に筆者が撮影したものである。